

〈教育実践研究〉

作業学習における「手応えのある学び」の実践

～生涯学習と「自分づくり」の観点から社会とつながる学習をめざして～

村川 恵・入川加代子

Practicing of Fulfilling Learning in Work Learning :Aiming Learning That Connects With Society From the Perspective of Lifelong Learning and “Self-Development”

MURAKAWA Megumi, IRIKAWA Kayoko

キーワード：生涯学習，自分づくり，作業学習，手応え，特別支援学校

Key words: Lifelong Learning, Self-Development, Work Learning, Fulfillment, Special school

1. はじめに

平成26年(2014年)1月に「障害者権利条約」を批准して10年が経過しようとしている。同条約24条には「障害者を包容するあらゆる段階の教育制度及び生涯学習を確保する。」(注1)とあり、障害者の生涯学習が推進される機会となった。その後、平成29年(2017年)に告示された特別支援学校学習指導要領には、「生涯学習への意欲の向上」(注2)として学校教育段階から将来を見据えた教育活動の充実を図ることへの文言が記載されたり、平成31年(2019年)3月には文部科学省、有識者会議より「障害者の生涯学習の推進方策について」(注3)が公表されたりした。また、国際的な動きでは、国連サミットのSDGsの共通目標4「質の高い教育をみんなに」では、あらゆる人に生涯にわたって学びを深めてもらうという生涯学習の促進が提唱されている。

このように、「学ぶ」ことは学校教育で完結せず、人生のどの段階でも「学び続けられる人」が持続可能な社会の担い手となり、豊かな生活者として生きることができると考えられるようになった。

特別支援教育ではこれまで「生涯にわたって学ぶ機会が十分にあったとはいえない」(注4)状況から、学校教育段階での取り組みが推進されているが、実際のところ、学習指導要領の「育成を目指す資質・能力」の3観点をどう取り入れるか、カリキュラム・マネジメントをどう進めるかについて重点が置かれており、児童生徒が「生涯にわたって学び続けよう」と思えるような授業をどう行っているかについての研究は少ない。ともすれば、余暇に関する授業を取り入れた、公民館などと交流をもった、などの実践が生涯学習へ向けた取り組みとして発信され、「学校(教師)が何をやったか」は把握できるが、「児童生徒にとってどうだったか」が置き去りにされている印象がある。

そこで、本実践研究では、知的障害特別支援学校の授業実践において、卒業後も「生涯学び続ける人」であるような生徒を育成するために、どのような授業を行っていくか、どのような

内面（心）の成長を促すかについて、高等部本科作業学習での取り組みをもとに考察していきたい。

2. 鳥取大学附属特別支援学校の概要

鳥取大学附属特別支援学校は、「楽しい学校生活の中で、『自分づくり』を基盤として一人一人の力を精一杯伸ばし、働くことに喜びをもち、社会の一員として生きる人間を育成する」を教育目標とし、「豊かな心をもち、生活を楽しむ」を教育理念とした児童生徒学生の内面の育ちを大切にしている。障害者の「社会的自立」が謳われた時代から変わらず「人格的自立」を旨とした教育を大切にしている。田中昌人氏、白石正久氏による発達理論を参考とした「自分づくり」という「人とかかわりの中で自我形成・自己形成を図る心の発達」を丁寧に見取りながら、教育理念である「生活を楽しむ」人を育成する教育とは何かを20年以上にわたって研究している。本校は、小学部、中学部、高等部本科の上に高等部専攻科があり、18歳で本科を卒業した後の学びを保障している。

3. 本校研究と生涯学習との関連

本校では、本年度（令和5年度）より「6歳から20歳までの『自分づくり』を育む教育実践～生涯学習の観点から教育内容を考える～」という主題で3年計画による研究を進めている。1年目の本年度は、それぞれの学部・科が「自分づくり」という内面の発達の観点から児童生徒学生を深く捉え、自分たちの実践を語り合うことを大切にしている。その中で生涯学習の観点を入れつつ検討を深めていく。

それぞれの学部の独自性を発揮して研究を進めていくため、生涯学習の捉えが学部によって異なるよう、1年目は生涯学習＝「自分づくり」＋「社会参加（社会とつながる）」学習として共通理解した。これは、様々な資料をもとに、佐藤（1998）の「人格的な発達と社会への参加という『二重の展望』にたいして自らを高める目的性をもつ営み」（傍線筆者）（注5）、「進歩的な生涯教育政策のもっとも基本的な原則の一つは社会参加（コミットメント）である。」（注6）や文科省発行の啓発資料「わかりやすい版 だれでもいつでも学べる社会へ～障害のある・なしに関係なく共に学べる生涯学習について～」（注7）などを参考とした。

本校の考える生涯学習は、それぞれの学部で「自分づくり」を進めながら、社会とつながっていくような学習

とし、どのような教育活動を展開していくかについては各学部で協議を重ねていく。社会といっても小学部の児童と20歳の専攻科生が捉える社会は違ったものだろうと考え、まずは「自学部の児童生徒学生にとって、社会とは？そして、社会につながっていく学習とは？」を考えた。

（この生涯学習の捉えについては研究が進むにつれて来年度以降変容していく可能性がある。）

中学部までは、自分の目に見える範囲が社会だったのに対し、高等部本科では、自分たちの作業製品を使ってくれる人など、自分が直接会ったり関わったりしている人よりも広い社会とつながっていく学習を展開することとした。作業学習においても「仕事の先にある人」の喜び、役立ちなどを考えながら、主体的に学んでいく学習を展開したいと考え実践を進めた。

4. 高等部本科概要

高等部本科のめざす生徒像は「自分をみつめ、個性をいかし、仲間とともに主体的に生活す

る生徒～自己選択・自己決定・自己責任…そして、気づき合う仲間～」としている。

また、高等部本科の週時程は表1の通りである。作業学習が設定されているのは週3日、2～4校時は10:05～12:05である。隔週で30分程度のビジネスマナーの学習を取り入れている。

高等部本科卒業後の進路は、生徒が自分の希望や願いに応じて選択することができる。例えば、令和4年度高等部卒業生6名のうち、3名が就労、3名が専攻科進学をした。そのため、高等部本科3年間は、「就労に向けて」の学習だけにとらわれることなく、生徒が自分自身と向き合い、1つ1つ自分で決めていく経験を重ねられる学習を展開することができる。

(表1) 高等部本科 令和5年度週時程

校時	月	火	水	木	金
	日常生活の指導(着替え・朝の会)				
1	さわやかA(自立活動)／課題学習(国語・数学・情報)				
2	生活単元学習	作業学習	作業学習	さわやかB(自立活動)	作業学習
3				生活単元学習	
4	日常生活の指導[給食・歯磨き・休憩]				
	日常生活の指導(掃除)		日生	日常生活の指導(掃除)	
5	LHR ／ 総合的な探求の時間	スポーツ (学校設定教科)	アート (学校設定教科)	保健体育	カルチャー (学校設定教科)
6					

作業班は3班あり、校内外からの受託作業、図書館業務、校内清掃を行っている「サービス班」、窯業、木工などを行っている「ものづくり班」、農作業と農作物の食品加工、屋外清掃を行っている「フィールド+ (プラス) 班」で構成される。所属する作業班は生徒、保護者の希望をもとに決定しており、人数の大きな偏りがない限り生徒の第一希望の作業班になるよう心掛けている。本実践研究では「サービス班」の図書館業務における取り組みを報告する。

5. サービス班での実践

(1) 作業学習について

本年度の高等部本科生徒数は19名であり、サービス班8名、ものづくり班4名、フィールド+班7名である。サービス班8名のうち1年生2名、2年生2名、3年生4名で構成されており、2～3名の教員が授業を担当している。

受託作業は校内からの通年の依頼として配布物の印刷、稟議用紙、リサイクル用紙のスタンブ押しなどの事務作業、消毒用布切りや配布、学校図書館作業(ブックカバー掛け、本の消毒、デイジー図書の整備、県立図書館からの貸し出し本の返却業務など)などとともに学校行事前に校内消毒や机椅子の設置などのほか、本年度は文化祭模擬店用のピザ生地作りも行った。校外受託作業としては、現在は鳥取市の兎ッ兎ワイナリーのブドウの袋拭き(※1)を請け負っており、2000枚以上のナイロン袋を数か月かけて再使用できる状態に拭き上げている。清掃作業は廊下、特別教室の清掃、窓拭き、古紙回収、エアコンクリーニング、加湿器の管理などがある。1回の作業時間を前半後半に分け、全員で受託作業を行った後、後半は図書業務を役割分担して行う日、2グループに分け清掃と受託作業を交代で行う日など作業内容やグルーピングの工夫を行っている。また、一通りの作業を全員が経験し終わったら、自分の得意や意欲に応じて作業を選択できるよういくつかの作業を用意している。

作業内容は広範にわたるが、学校図書館司書が授業に入る学校図書館業務について報告する。
(※1 鳥取市の兎ッ兎ワイナリーでは、ブドウ栽培とワイン販売を行っている。ワインに加工するブドウと販売用のブドウがあり、販売用のブドウに傷や虫食いがいよう、ビニール袋をかけて栽培している。収穫後のビニール袋のごみや汚れを取り、拭き上げて翌年も再利用できるようにすることでごみの減量化を図っている。)

(2) 生涯学習の観点から作業学習を考える

生涯学習の観点から、図書館業務でも社会とのつながりを意識できるような学習活動を展開したいと考えた。また、「学び続ける人」を目ざした時、作業学習として大切にしたいことを改めて検討した。

作業学習で生徒の意欲や主体的な姿が見られる場面に注目すると、製品や農作物を販売する作業班では「売れた。」「買った人が喜んでくれた。」「自分のアイデアが形になった。」「お礼を言われた。」など、行為に対しての成果が分かりやすく、達成感を得て次への意欲に結び付きやすい。しかし、事務作業、清掃作業では売り上げは得られない。しかし、これまでの生徒たちの作業をする姿を見ていると、誰に感謝されなくても、人を見ていなくても、もちろん金銭などの報酬がなくても、作業に対して手応えを感じ、作業メンバーと緩やかな助け合いをしながら仲間としてまとまって働いていく姿に成長していった。授業前は「今日は何する？」と期待感を膨らませ、終了時間が来ても作業が終わらなかつたら「あと少しだったのに〜。」と残念がる姿からは学びへの主体的な心の動きが見られる。

このような生徒たちの様子から、「手応えを感じることで自分の成長を実感できること」がやりがいへつながり、主体的に学習を行うのではないかと考えた。それは本校が大切にしている「自分づくり」にもつながる。生徒自らが「自分づくり」を進める時、「憧れ」の気持ちの膨らみを大切にしており、これまで「憧れ」が膨らむような教材、専門家との出会いを意識して授業を行っていた。例えば、学校設定教科で本格的なピザ窯を外部講師の指導のもと1年がかりで作らあげたり、高等部本科、専攻科合同余暇活動として、プロの芸術家を招いて作品作りを行ったりした。

余暇の拡がりやねらいとした学校設定教科では、新しい世界との出会いを感じられるような様々な活動を取り入れたが、毎日の作業学習の中での「憧れ」の気持ちの膨らみとは、「今日は、ここまでするかも。」「新しい作業、今日は自分が教えてもらう番だな。」と、ほんのわずかの成長を感じることもなのだろう。そのため、作業を通して「自分が成長した。」と実感できる授業づくりを模索していった。自分の成長を感じる時は、作業終了後、もしくは同じ作業をした時(次回)である。2回目の作業で「前回よりも…」と感想を述べる生徒が多い。そのため、作業の振り返りを大切にしたい。

また、新しい作業、急な仕事が入った時には「これは、～先生からの依頼で、～の会に使うから至急。」など、依頼相手と期日を伝えるようにしている。そのような時、生徒は「しゃーないなあ。」と言いつつも一致団結して休憩も入れずに働く。春先には「えー、自分でやればいいじゃん。」「じゃあ、お金払えよー。」と言っていた生徒たちが、「〇〇先生が、～してほしいって言った。」と自分から仕事を取ってくることもある。「自分たちの力が必要とされている」「自分たちは役に立つ仕事をしている」と感じられることが大事だと思われる。作業学習で「社会とつながる」とは自分の仕事「社会の役に立っている」と実感できることだと考えた。

生涯学習の観点から作業学習では、「自分の成長を感じられ」、「社会の役に立っている」と実感できる授業づくりを意識した。

(3) 実践の様子

学校図書館業務は5(1)で述べたように、児童生徒学生が図書館を利用しやすいように学校図書館司書からの依頼を受け様々な仕事をしている。その中で新刊本、寄贈本に保護シートをかける「ブックカバーかけ」と呼ばれる仕事がある(写真1)。紙に粘着性のあるシートをつけるので、「失敗したらやり直し」をしづらい。慣れないうちはシートが皺になる、本とシートの間に空気が入る、必要以上にシートをカットしすぎるなどの失敗がある。また寄贈本は経年劣化により本に歪みがあったり、表紙が劣化していたりして、シートが接着しづらいなどの難しさがある。そのため、1回失敗したら「私、苦手だから。」としり込みする生徒もいる。



(写真1) ブックカバーのかけ方

しかし、本にはハードカバー、ソフトカバー、雑誌など生徒によって難易度を変えることができ、仕上がりを見て成長を感じられやすい。また、実際にブックカバーをかけたものが配架され、待っていた児童生徒に喜ばれるなど仕事の役立ち感が分かりやすい。何より「専門的な仕事をしている」という生徒の自信にも結びつきやすいと考え、年度当初から定期的に取り入れている。

3年生4名の中には以前の作業で行ったことがあるので「自信がある生徒」と「失敗したからやりたくない生徒」がいた。また、1,2年生には「面白そうだからやってみたい生徒」と「難しそうならしたくない生徒」がいた。春は「全員が1回はハードカバーとソフトカバーを体験します。」と提案し、1回2名程度で順番に仕事を覚えていった。「全員がする」「もともと難しい作業だから、失敗しても大丈夫」と伝えることで、渋々ながらもやり始める生徒もいた。

作業を覚えてくると、上手くなった生徒が「ほら、私だってできたんだから、やってみなよ。」と他の生徒を励ます姿が見られはじめた。技を習得することで、どんどんカバーをかけていく生徒もいれば、「こうしたほうがやりやすい。」とよりよいやり方を模索する生徒も出はじめた(写真2)。

全ての生徒が得意なわけではなく、積極的にはやりたがらない生徒もいる。やりたがらない生徒は手先が不器用か、失敗を恐る生徒の場合が多い。失敗を恐る生徒は実際には上手にできるのだが、わずかな皺が入るなど完璧にできないと「失敗した。」と判断を下すことが多かった。そのような生徒は、成功と失敗の間の「まあまあできた」の段階がない。「失敗しても大丈夫。」の言葉は慰めにはなっても、次への意欲には向かいづらいつと気づいた。完成品をチェックする時、「表紙、裏表紙の溝までぴったり押さえたね。表紙裏(見返し)の皺が寄ったね。ここは難しいから…」と、工程を分けて評価を返すことにした。生徒の中で「5か所は上手にできた、難しい1か所は失敗したけど。」と成功と失敗の二分的な見方から、



(写真2) 真剣なまなざし

成長していく自分への見方へつながらないかと期待している。

ある程度技術が高まったため、11月に今井書店より実際に仕事をしている専門の方2名を非常勤講師として招いて指導を仰いだ。まず、ブックカバーのかけ方を見せてもらい(写真3)、その後マンツーマンで指導を受けた(写真4)。20～30分、どの生徒も真剣に指導を受け、受け終わった後は疲れ果てるほど集中していた様子だったが、静かな興奮があったようで、何を教わったのかを報告しあっていた。自分の失敗経験から、自分のかけ方でうまくいかなかったのはどこなのかを質問する生徒もいた。手の動かし方や力を入れる方向によって出来上がりが変わってくることを実感している様子だった(写真5)。



(写真3) 今井書店の方のブックカバー掛け



(写真4) マンツーマンで指導を受



(写真5) 本の端にしわができない手の動かし方

(注：写真は保護者からの許可を得て使用している。)

(4) 今後に向けて

11月に胸元に生徒がデザインしたマークを付けたお揃いのエプロンを準備した。市販のエプロンに「サービス班」のマークを貼りつけ、図書館や書店で働く人のような「本に関わるプロの人」という意識がもてるようにした。面白いことに、マークをデザインした生徒が、エプロンができあがった頃から、大きな声であいさつをするようになった。自分の仕事が実際に使われていることへの自信となったのかもしれない。エプロンは今後図書仕事の時に使用していきたい。

また、助成金を利用して学校以外の本をカバーすることもできると考え、湖山西公民館に交渉して図書コーナーの本のカバーかけを請け負う予定にしている。学校と公民館は徒歩圏内なので、引き受け、納品を生徒自身ができれば、より社会とのつながりを意識できるのではと考えている。今後、学校の外に仕事を得ることができれば、より地域とつながり、社会参加へ向けた学習が展開できると思われる。本年度は「社会の役に立つ」までは至らなかったが、実際に今井書店で働いているプロの方の指導を仰ぐなど、技術を習得する機会を得た。本格的な作業に従事することで社会とのつながりを意識したり、生徒の内面の成長を促したりすることができたのではないだろうか。

6. まとめ

令和5年度の4月から11月までの実践をまとめたのが本稿である。

実践を通して感じたのは、「成長を実感する」ためには、経験と言葉でのやりとりが重要である、ということである。毎回作業はじめに生徒が作業日誌に「今日の作業」「今日の目標」を書き、作業終わりに「振り返り」を書く。ほんのわずかの自分の成長、頑張りを実感するためには、「今日の目標：作業をがんばる。」「今日の振り返り：ブックカバーをがんばった。」では無理である。より具体的に「今日がんばるのは、どこの部分？いつ？」と生徒に問い、「では、前回シートを切りすぎたから、切る時にどうする？」と具体的に目標を書くように伝える。作業終わりには、「目標だったシート切りの時、どうだった？」と具体的な場面の振り返りを促すようにしている。半年ほどでは大きな変化はないが、作業日誌は少しずつ充実してきている。作業内容の工夫だけでなく、導入、振り返りも工夫していきたい。

また、困難に出会った時に支える仲間の重要性も感じた。作業時の困難とは、「これ、今日で終わらないかも。」「この作業、好きじゃないんだけど。」という程度の困難ではあるが、生徒にとっては、主体的になれない場面である。高校生は教師が励ましたり、なぐさめたりして動くような時期ではなく、内発的なやる気と仲間の力で動き出す。そういう時の集団は少し声が大きくなると感じる。内田(2022)によると「合意形成とは、全員が満足する解を探りあてることではなく、「不満足度を均す」こと。」(注8)とあるが、おそらく「さあ、なんとか面白くしよう。」「私もやるからさあ。」と互いに気持ちを盛り上げていき、「実はそんなに面白くない作業」を「みんなでやり切った作業」へと自分たちで変換しているように感じる。「自分づくり」とは、人とのかかわりの中での心の発達であるが、生徒の姿からそれを感じ取ることができる。

「自分づくり」をしながら社会とかかわる(社会参加する)学習を生涯学習と考え、作業学習において検討を行ってきた。半年ほどの実践では、「社会とかかわる」「社会参加する」とまではいかなかったが、学び続けていけば、少しずつ広い世界へ学びを広げていけるのではないかと考えている。

謝辞

日本教育公務員弘済会の教育実践研究助成金を給付していただき、実践に必要な物品(エプロン、図書整備用品)や講師謝金に当てて活動することができました。感謝いたします。

今回外部講師派遣に協力していただいた今井書店の皆様、ありがとうございました。

本実践を支えていただいた鳥取大学附属特別支援学校の皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

村川恵(鳥取大学附属特別支援学校 教諭)

入川加代子(鳥取大学附属特別支援学校 学校図書館司書)

注

注1 外務省「障害者の権利に関する条約」(最終閲覧日2023年11月26日)

https://www.mofa.go.jp/mofaj/fp/hr_ha/page22_000899.html

注2 文部科学省「特別支援学校高等部学習指導要領」 1章2節第5款1(5)

注3 文部科学省「障害者の生涯学習の推進方策について―誰もが、障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会を

指して―(報告)」(最終閲覧日2023年11月26日)

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/041/toushin/1414985.htm

注4 文部科学省「学校卒業後における障害者の学びの推進方策について(論点整理)」(最終閲覧日2023年11月26日)

https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/09/18/1409252_1.pdf

注5 佐藤一子(1998)『生涯学習と社会参加』東京大学出版会, p. 51

注6 エットーレ・ジェルビ(1983)『生涯教育』東京創元社, p. 20

注7 文部科学省(2020) 啓発資料リーフレット「わかりやすい版 だれでもいつでも学べる社会へ～障害のある・なしに関係なく共に学べる生涯学習について～」

注8 内田 樹(2022)『複雑化の教育論』東洋館出版社 p. 156

参考文献

- ・田中昌人・田中杉恵(1981-1988)『子どもの発達と診断1-5』大月書店
- ・川井田祥子監修・鳥取大学附属特別支援学校著(2023)『「自分づくり」がひらく未来』
- ・三木裕和(2019)『はたらく WORK 障害のある人の働く姿から』きょうされん
- ・國本真吾(2023)『ライフワイドの視点で築く学びと育ち―障害のある子ども・青年の自分づくりと自分みがき―』日本基準